

非流暢でぎこちなくせにうまくいく行動者の資格とは？

定延利之¹・船橋瑞貴²・林良子³・岡田美智男⁴

1. 企画の趣旨

「ニュース原稿を読み上げるアナウンサーとはちがって、日常的なコミュニケーションにおける多くの話者は、流暢ではない。だが、非流暢なりに、相手の助け舟を呼び起こすなどして、コミュニケーションはなんとかうまくいっている」という認識は、研究分野によって程度の差こそあれ、今では広く浸透している。だが、誰が、どのように「うまくいく」のだろうか？——以上の問いは、発話だけでなく運動全般に当てはめることができる。運動がぎこちないにもかかわらずコミュニケーションの中で「うまくいく」とは、どのようなことなのか？ この OS は、言語学・医学～音声科学・言語教育学・関係論的ロボティクスの研究者らの共働により、「うまくいくこと」そして「うまくいく者」に光を当てようとするものである。

発話の非流暢性は医学、言語学、言語教育学で研究されてきたが、その研究形態は多分に相互排他的である(Lickley, Robin J. 2015. “Fluency and disfluency.” In Melissa A. Redford (ed.), *The Handbook of Speech Production*, pp. 445-474. Malden, Mass.: Wiley-Blackwell). 他分野からの刺激が乏しいために、研究が沈滞している場合もある。たとえば言語学では、発話の非流暢性の研究は、コーパス言語学と一部の文法研究を除けば、活性化しているとは言えない状況にある。この OS は、さまざまな非流暢な話し手がどのように「うまくいく」のか（あるいはいかないのか）という問題意識から出発することによって、これらの諸分

¹ 京都大学。専門は言語学。著書『文節の文法』（2019, 大修館書店）で日本語母語話者の非流暢発話に見られる規則性を論じている。日本認知科学会会員。

² 群馬大学。専門は日本語教育学。流暢な話し方を学習者に目指させる現行の「流暢性教育」ではなく、学習者の非流暢性を母語話者の自然な非流暢性に転換させる「非流暢性教育」を構想している。

³ 神戸大学。専門は音声科学。病理的な言語障害と、MRI 等を用いたその調音動態ならびに音響的特徴に知悉している。

⁴ 豊橋技術科学大学。専門は関係論的ロボティクス。著書『口ごもるコンピュータ』（1995, 共立出版）・『弱いロボット』（2012, 医学書院）で、社会化された非流暢性・ぎこちなさ研究の先陣を切っている。

野を結び付け、次に発話を運動全般に一般化することで、関係論的ロボティクスとの交流を果たした上で、認知科学全般の研究者との学際的な交流を目論むものである。より短期的には、(フロアの一部も巻き込んだ形で) 論文集の出版を目指したい。

2. スケジュール

趣旨説明の後、4件の発表をおこない、フロアも含めたディスカッションで締める。4件の発表は、直前になされた発表の射程を包含する形で配置されている(図1)。各発表に対する質疑応答の時間は、フロアからの質疑がない場合は次の発表者とのクロストークに当てる。

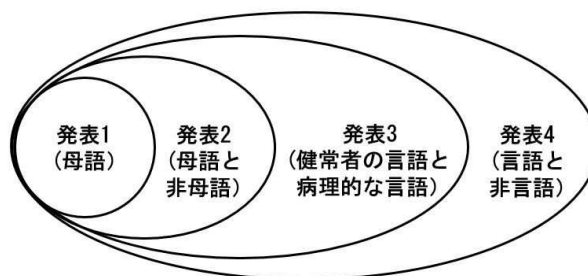


図1: 4つの発表の関係

9月19日(土)

13:30-13:35 趣旨説明(定延)

13:35-13:55 発表1「母語話者の非流暢性」(定延) + 質疑応答

日本語母語話者の非流暢な発話について、話し手像・態度・出現環境の3点から規則性を示すと共に、それがコミュニケーションの中で生む効果を論じる。

13:55-14:20 発表2「母語話者の非流暢性と学習者の非流暢性の比較」(船橋) + 質疑応答

日本語学習者の非流暢性を母語話者の非流暢性と比較対照し、コミュニケーションに貢献する非流暢性を日本語教育に取り入れる方策について論じる。

14:20-14:45 発表3「健常者の非流暢性と言語障害者の非流暢性の比較」(林) + 質疑応答

日本語母語話者・学習者の発話の非流暢性と、言語障害者の発話の非流暢性の特徴や共通点について、各種検査法の比較や、音声生理学的観察などの応用可能性の観点から論じる。

14:45-15:10 発表4「発話の非流暢性と行動のぎこちなさ」(岡田) + 質疑応答

特にコミュニケーション内で生まれる効果に焦点を当て、発話の非流暢性と行動のぎこちなさについて、ロボットを用いた実験を通して論じる。

15:10-15:30 ディスカッション